The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	労働と労働意識 : オートメーション論議の批判的再生を求めて
Author(s)	松戸, 武彦
Citation	年報人間科学. 1981, 2, p. 14-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9039
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

労働と労働意識

——オートメーション論議の批判的再生を求めて——

松戸武彦

はじめに

産業社会学の主要な関心がオートメーション論議から離れてすでに十年の月日が流れた。一九五〇年代の終りから六〇年代にかけて、多数の研究者の活発な参加のもとに行なわれたこの議論も、その熱がさめるのが意外に早かったといえる。

論争の中心的な争点は、オートメーションの進行に伴う労働の再技能化をめぐるものであり、周知のように大別して相互に対立する二つの見解が存在した。今ここで、論議の詳細に立入ることはできないが、二つの見解を簡単にまとめると次のようになるだろう。

一方の見解によると、戦後、特に一九六〇年代に入って本格化し、定着しはじめた化学、石油精製などの装置系工業の労働は、印刷産業等に見られる職人的労働や、単能機械、あるいはベルトコンベアを中心とした組立工程における部分的反復労働とは異なる特徴をもっているという。つまり、装置系工業に見られる連続処理工程型生産の労働は、監視や保守を中心とするものになったとされる。そして、この見解によれば、こうした型の労働は、作業上の諸々の判断に関して作業員が参与できない状態の揚棄、責任が決定的な技能要件となる工業労働の再技能化によって特徴づけられた。(1)

この説のもっとも主要な主張者としては、ブラウナーが挙げられるし、トゥーレーヌの「技術と労働の歴史的関係についての三段階説」を取り入れ、拡大解釈したマレにおいてもほぼ同様の思考が見られよう。(2)

しかし、こうした見解は、ブライトらを代表とする反論を受けることになる。彼はオートメーションに条件づけられた技能の増加を認めるものの、かならずしも、非技能的労働の解消はなく、むしろ、一定の自動化段階が達成されれば、労働者に対する新技能要件の要求はなくなると主張した。そして、最終的に「操作職員の技能要件は導入の初期に上昇するが、オートメーションの定着と共に低下する」(3)という命題を導き出す。

ところが、こうした論争も、一九七〇年代に入るとそれほど明確な決着がつかないままおおかたの研究者の関心からはずれていってしまう。いや、むしろ、この問題における従来の問題設定、つまり、

労働は技能化ないし知能化したかどうかという問題設定自体への疑問を実証的な研究のなかから表明したウッドワード[4]や中岡哲郎[5]の考察を契機として、この「オートメーション論議」自体を不毛なものであったと見なす評価が一般化したように思われる。以降、今日までの約一〇年間、この分野の研究者の関心は著しく個別化されたということができる。

だが、論争というものは、多くの場合、論点に関して多元的である。したがって、研究者の関心が一つの論争から移動し離れていくことは、それ自体としては、研究者集団の思想的潮流の変化を意味するものではあっても、論争が含意していた諸々の問題局面すべてがいっきょに解決を見たということを意味するとは限らない。その点で、かの「オートメーション論議」の終焉は重大な積み残しをしたように思われるのである。

では、積み残された重大な問題局面とは何であろうか。それは、労働状況の分化と労働意識がどのように対応しているかを問うものであった。事実、そこで生じた論争は止揚されないまま現在に至っているように見える。

私のみるところ、こうした積み残しが生じた最大の原因は、労働意識の研究が労働満足度の論議に矮小化されたことにある。しかし、オートメーション論議自体、単に労働の再技能化が問題ではなく、工程の編成様式の変化に伴う労働の構造的変質を問うものであったように、この問題も労働満足度や労働志向の基底をなす労働の理解様式を問うものではなかったであろうか。

とすれば、我々は次のような問題に直面せざるを得ない。すなわち、オートメーションを中心とする電気的情報処理工程の導入によってもたらされた労働の構造的変質と労働者における労働の理解様式はどのように「交差」したのであろうか。本稿の課題もここにある。

こうして、労働状況の分化と労働意識の対応という問題設定は、より深い射程をもつことになった。その意味で、この問題をいま一度現在の段階で吟味しなおしてみることは意味があると考える。

さしあたって本稿では、この論点に関して対立する諸見解を比較、検討することから歩を進め、これらの議論が孕む問題の性質（プロブレマティーク）を明らかにしていこうと思う。

一、労働意識に関する諸見解

労働意識の研究は、この議論が労働疎外の問題に第一義的な関心を置いたことを反映して主に、仕事において幸福であるか、不幸であるか、すなわち労働満足度の研究として具体的な考察のなかでは現われてくる。

労働満足度の規定要因を社会学的見地から一定の理論的自覚をもって初めて問題にしたのは、人間関係学派であったと思われる。そして、オートメーション論議以前においては、この問題について人間関係学派の所論が定説になっていたと見てよいであろう。

この学派の主張は、次のようにまとめられる。すなわち、労働満

足度を規定するものは、「企業の一般的風土や、従業員間の、および従業員と監督者とのあいだの対人関係の質である」(8)と。我々にとって、ここで重要なことは、この学派の論者達が労働の具体的なタイプと労働満足度の関係を重要視していない点である。

ところが、こうした定説に対して、ブラウナーは、工業労働の形態上重要な差異があると認められる産業部門をいくつか選び出し、そこで働く従業員の比較研究結果から、次のように反論する。「労働状況における差異は、種々の経営体や工業分野に携わる人々の間に存在する労働満足度の相違を説明しうる」と。

彼によれば労働の威信、労働者集団における協業の形態などと並んで、労働に対するコントロール可能性が労働満足度に対する重要な要因と考えられ、したがって、労働テンポに関する自律性の程度並びに団体行動の形成、労働環境の技術的、社会的所与、指示や監視からの自由は労働に対する態度にとって中心的な意義を有しているのである。(8)そして、まさに労働に対するコントロール可能性の点からして、装置系工業部門のオートメーションが展開させる労働状況がもっとも高い労働満足度を示すものとして挙げられ、反対に、組み立て部門の労働状況がもっとも低い満足度を示すものとして指摘されることになった。ここでは、労働状況の客観的所与が労働に対する満足にとって基底的意義を持っていることになる。彼は労働のタイプと労働満足度との間に密接な関連を見いだしているのである。そして、この点に関してはオートメーション論議に重要な役割をはたしたマレらフランスの労働社会学者達もほぼ同じ線上に立っていたものと思われる。

とはいえ、もちろん、ブラウナーは反復的部分労働に携わる人々が大量生産の時代からきびしい労働状況に対していわば必然的に労働に対する不満足感をもって反応してきたとは想定していない。というのも、労働に対する期待感は、客観的状況における「決定からの疎外」(フレームトベスティムング)と主観的反応における満足感とが同時に存在するほど矮小化され、用具化されうるからである。(9)にもかかわらず、「決定からの疎外」状況がきわだって少ない労働状況では、労働に対する肯定的な態度を彼が想定していることは疑いないと主張するのである。したがって、この論争の第一の論点に関する「オートメーション生産への移行に伴う工業労働の再技能化」という彼の主張は、「装置系工業のオートメーション労働の進行に伴う労働満足感の全般的上昇、並びに労働に対する純粋な用具的態度の減少」という見解に発展させられたのである。しかし、こうした事態の把握は、異議をとなえられざるをえなかった。

反論としてターナーとローレンスの研究成果がまず挙げられよう。確かに、彼らも型にはまった、内容のとぼしい労働に対してよりも複雑な労働課題に対して労働者はより肯定的に反応する、というテーゼから出発している。(10)にもかかわらず、彼らの調査結果はこうしたテーゼに反論するものであった。彼らによれば、労働の満足度は労働の多面性、自律性、責任の大小よりはむしろ労働に特有でない要因群、特に労働者層の出身に関する地域性や基底文化上の特性に依存するという。(11)こうして労働状況と労働満足度との間の

体系的で一義的な関連はターナーとローレンスにおいては否定され、労働満足度に影響を与える複合的で多数の媒介的な変数が導入されることになった。

一方、ターナー、ローレンスとは異なった視点に立ちながら、ゴールドソープらの研究もブラウナーの見解に反論を提供している。[12]結論からいえば、彼らも労働に対する満足度を決定するのは結局のところ労働状況の所与性ではないという。彼らの見解によればこれに影響を与えるものは「労働志向」なのである。「労働満足度に関する問いは、我々が『労働志向』として表示しているものに対する、より基底的な問いへの関与なくしては有意味な議論ができない性質のものである。労働に対してどのような願望、あるいは期待を託しているかを知らなければ、すなわち、労働が彼（労働者）にとってどのような意義を持っているかを知らなければ、彼の働いている状況に対してどのような労働評価がぴったりくるものなのかは理解できない。」[13]そして、その際、労働に対する態度に前もって作用する「労働志向」は労働における諸経験や企業内での諸経験からは独立したものと考えられている。彼らの調査は、多くの労働者（特にイギリスの）は、純粋に用具的な労働志向、つまり労働を生活の再生産手段としてのみ考え、労働についての判断に関しては骨おしみと経済的報酬の最大化の観点を前面にすえる性向を持っていることを教えたが[14]彼らによればこうした志向は、不満足な労働状況に対する反応として説明されるのではなく、労働者の全体社会上の地位の帰結として説明されるべきだとされた。[15]

ゴールドソープらの主要な論点を要約してみよう。質問を受けた労働者の大部分には、自分達の労働状況の優劣とは関係なく、賃金労働者として労働市場のもとで自らの労働力を時間で、あるいは出来高で販売することが問題なのである。その際、第一に労働を用具的に見、経済的利得に興味をおくのは避けられない。また、労働者層は、生産者としての自己充足や労働における自己実現の程度を高めることよりも、消費能力や家族の生活水準を高めることの方に動機づけられるようになっている。

この考え方からすれば、労働の領域における特殊な経験は、具体的な職務に対する労働者個人個人の姿勢にとって、また労働者全体の社会意識にとっても重要な要素でなくなる。したがってその結果、工業労働の再技能化が労働満足度、あるいは労働志向に対して影響を与えるという見解もまた否定されざるをえない。

さらに、ランゲらの西ドイツにおける左翼的研究者もまた労働態度の問題についてはゴールドソープらと似たような、しかし一方で奇妙なことに人間関係学派と類似の立場に立つ。[16]原則的に理論的考察から彼らは種々の労働状況に応じた労働者内部の分化は許容できないものとみなす。彼らは次のように主張する。すなわち、たしかに技術的発展のなかで工業労働の具体的条件は変化した。しかし、賃金労働者の労働状況は本質的にはこの変化と関係がないとされる。つまり、技術的変化は「課題としての労働」に影響するのみであって「上下関係としての労働」に影響するわけではない。そして、まさにこの契機こそが労働状況を本当に構成するものと考えられて

いる。こうして、彼らによると、資本主義社会における労働者の階級状態こそが――それは社会的な従属や依存として表面化する――労働に対する態度を形作るのである。その際労働者層のなかに存在する労働満足度の相違は、彼らの見解によれば、種々の異なった労働状況における労働者の経験を基にするよりも、企業内部の一般的社会状況に対する主観的に異なった反応を通して生じるとされた。ここにわれわれは、ゴールドソープの見解と、人間関係学派の意見との奇妙な同居を見てもあながち誤りだとは言えないであろう。

さて、以上のような諸々の見解が出そろった後に、西ドイツの産業社会学者が行った一連の調査は、この論争に対して非常に興味ある結果を示した。われわれのみるところ、それは諸見解の対立を止揚するための有力な足がかりを与えているように思われる。(17)

調査はケルンとシューマンによって行なわれたものであるが、端的にいってその結果はブライトの立場を支持しながらもゴールドソープの見解と合致する部分を少なからずもつものであった。

彼らは、工業労働を反復的部分労働から中央制禦室労働に至る七つの労働タイプに分け、それらの労働に携わる人々に関する調査結果から、客観的な労働状況と労働に対する態度との間には明らかな関連があると結論づけた。彼らによれば、極端に制限的な労働条件では、(ここでは反復的部分労働、また繊維産業や食品工業のビン詰め工程等に見られる自動装置点検労働が挙げられている)労働満足度は他に比べて、明らかに僅少であり、他方良質な労働状況に対して労働者の多くは肯定的に反応すると言う。(18)しかし、問題は、こうした労働に対する満足、ないしは不満足の理由であった。

彼らの分析は、評価基準が生産労働者と保守・保全労働者の間で異なっていることを教えている。生産労働者は一般に自らの判断を労働負荷と経営条件によって方向づけていたのである。(19)したがって、反復的部分労働や自動装置点検労働に携わる人々の批判も自らの社会的再生産能力をおびやかす業務条件に、つまり過剰負荷による労働力の損耗に集中していることがわかる。その際、経営条件、特にこの調査では金銭上の報酬は、いわゆる補償機能をもつか、あるいは、もし「少ない」と否定的に評価された場合には労働に対する忌避的態度を強めることになった。したがって、当然仕事の多様性、自律性、要技能性に対する要求は第二義的な意義しかもたないことになる。いいかえれば、労働のよろこびといった考えは、彼らのように制限的な労働条件のなかで働いている労働者にとって、重要性のないものであり、現実性ももっていないのである。(20)

こうした考え方は、生産労働者の他の部分においても変わりはない。ブラウナーやマレによって生産労働の技能化された部分として想定された労働に携わる労働者でさえ、自分達の仕事を反復的部分労働や自動装置点検労働に携わる人々と基本的には同様な視点で評価しているのである。(21)

すなわち、多くの場合、肉体的―精神的費消と物質的報酬が相殺されるのであり、中央制禦室労働のようにこれら両方のファクターについて肯定的な評価が与えられるときには労働に対する反応自体

すこぶる肯定的なものであったとされた。彼らに許された自己裁量機会の大きさ、また彼に要求される高度な技能も単に職場のいごこちのよさを高めるにすぎず、根本的な優位性を示すものとしてはみなされなかったのである。この点をケルンらは次のように表現した。「プラント操作労働や中央制禦労働についている人々でも、業務活動それ自体がもつ特性や業務活動をたくみに遂行しようとする視点から労働満足を動機づけるいわばエキスパート意識ともいえる意識を形成しているわけではない。」彼らによれば、労働における自律性の増大や技能化の進行も労働者の意識のなかでは業務活動にエキスパート的な相貌を与えるまでには至っていないと判定されたわけである。この点でこの調査は、ブラウナーや、とりわけマレの見解、つまり生産労働の技能化はそれに携わる労働者の労働に対する評価の枠そのものまでも変えてしまうという考えに反証を提供している。いいかえれば、問題を労働状況と労働満足度の関連に限定するなら、客観的労働状況の分化と労働満足度の相違に一定の明白な連関がみられるというブラウナーらの見解を支持するものであるが、より根底的な点ではむしろゴールドソープらの意見と軌を一にするものであるといえよう。

にもかかわらず、この調査は「労働志向」に関してゴールドソープらの所論にも反論する材料を与えている。彼らによれば、保守・保全労働者に対する質問から用具的労働志向といえども決して賃金労働者の意識における定数を示しているわけではないとされる。(22)つまり、保守・保全労働者においては労働に対する生産労働者とは異なった態度が見うけられるのである。ここでは、業務はエスパートとして技能化された相貌をもつ。理論的知識と技術上の巧緻性が目だって要求され、かわりに日常的ルーティン業務はすくなくとも部分的には姿を消す。そして、最も注目すべきことであるが、ここでは労働を評価するさいに持ち出される評価基準自体の相違が存在する。労働内容上の基準がドミナントな意義をもっているのである。明らかにここでは、ゴールドソープの見解に反して労働の具体的なあり方が労働者の労働志向に色濃く反映していると見ざるをえない。

では、一体こうした結果はどのように解釈されるべきであろうか。われわれの見解からすれば、そうした妥当な解釈を考察していく過程こそが諸々の見解の対立を止揚するキイ作業となるはずである。そして、その作業は従来の産業社会学の労働者意識研究から欠落した部分に一定の照明を与えることになると思われる。

二、労働の理解様式

われわれにとって、ケルンの調査が提起する問題点は次の二点である。第一に、労働満足度と労働状況の相違とには一定の関連が見られるものの、その理由付けに関しては生産労働者の間に変化がみられなかったこと。つまり、生産労働のなかに存在する種々の労働状況の相違は単に「きつさ」の相違として認知され、彼らにとって機械化やオートメーションの導入も肉体的エネルギーの消費節約と

してのみ効果すること。にもかかわらず、第二に、保守・保全労働者においては生産労働者に広くわけ持たれている用具的労働志向が少数派に転ずることである。

とくに第二点が強調されれば、労働志向が具体的な労働状況によって左右されているように見うけられる。これは、ゴールドソープやランゲ等の見解に反論を与える材料である。つまり、資本主義社会における労働者階級状態や、労働者層の社会全体にしめる地位からのみ、労働志向は形成されるという主張には、保守・保全労働者においては表出的労働志向がむしろ支配的だという結果によって留保がつけられたのである。

しかし、一方で第一点の調査結果からみれば、労働状況の変化と労働志向の変質がかならずしも連動していないように見える。では、こうした現象はどう解釈されるのであろうか。

さしあたってこれらの理由は、まず、労働自体のあり方から説明されるべきであろう。すなわち、各タイプの生産労働者間には労働志向の変化をもたらすほどの労働状況の相違が存在しないのに対し、保守・保全労働者と生産労働者との間には労働志向の変質が生じるほどに労働状況の上で隔たりがある、という意見である。ケルンら調査者自身は、「労働状況の変化も生産労働者にとっては労働志向そのものに変化を与えるには及ばなかった」として、この見解を取った。

この見解では二つの点が重要である。一つは、労働状況の労働志向に与える影響を相当大幅に認めている点である。こうした観点は、ブラウナー等の観点と基本的に軌を一にするものである。

いま一つは、生産労働の各タイプに基本的な変動はおこっていない、という視点である。つまり、導入されていった各種オートメーションも生産労働者の労働態度の核をなす労働志向を変質させるほど基底的なものではなかった。むしろ労働志向の差異が生じるのは、いぜんとして、生産労働者対保守・保全労働者というオートメーション導入以前から存在した労働者の区分に依る、という視点である。この視点はオートメーションの影響に関する否定的な評価という点で重要な含意を含んでいるといえよう。事実、生産労働者のなかでもっとも先端的な部分である中央制禦労働に携わる労働者でさえも、彼らの労働に対するメルクマールについて質問された際に、職業教育の有無や専門的な、あるいはインテレクチャルな能力を挙げていない。むしろ、重要なものとして、反応力とか集中力、責任感の有無が答えられている。一方、保守・保全労働者が行なっている労働は、ケルンらによればエキスパート的な相貌を基本的特徴としているという。つまり、理論的知識や技能の巧緻性が著しく要求され、日常的ルーティン業務は少なくとも部分的には姿を消しているとされた(23)。

したがって、こうした観察からケルンは、用具的労働志向が賃金労働者の意識における定数ではなく、特定の労働状況を背景にして形成されると結論づけたのである。

しかしながら、さらに立ち入ってみれば、次のような疑問が出てくるように思われる。すなわち、生産労働者層の労働と保守・保全労働者の労働はその特徴において差異があることは認めなければな

らないにしても、それはケルンらが主張するほど明瞭なものなのであろうか。言いかえれば、保守・保全労働者の労働は、今日それほどエキスパート的相貌を呈しているのだろうか。

この点について、すでに中岡は六十年代の終りにパトロール工のパトロール範囲拡大（ジョブエンラージメント）現象に言及しながら、保守・保全労働＝エキスパート的業務という図式に疑問を投げかけている。彼によれば、高度化した装置工業の保全部門では、「予防保全」がその中心的位置を占めるという。「予防保全」は「故障・異常の予防、装置の常時最適状態への維持を目標とするものであるが、これは修理を中心とした従来の保全業務の新しい段階としてではなく、むしろ制御の作業の一部門としてとらえるべきだ」(24)というのが彼の主張である。こうして高度化した装置工業での保全職務は事実上点検業務になっているのである。そこでは労働のエキパート的相貌はもはや過去のものになっている。

このような保全業務の内容的変化についてはその後、西ドイツの産業社会学内部でも確認されるに到っている(25a)。そうだとすれば、保守・保全労働において、エキスパート的特徴が近年事実上姿を消しつつあるにもかかわらず、こと労働志向に関しては用具的労働志向が強い生産労働者層とは依然として一線を画していることになる。したがって、右に見られるような労働志向の相違の原因も、具体的な労働状況の差異に一義的に帰着させるべきではなく、労働志向という評価的態度をより根底から支えている認知、理解の様式に求められるべきであろう。つまり、労働志向は、労働者が彼の労働をどのように理解しているかという「労働の理解様式」に依存していると考えるのである。

もちろん、この「労働の理解様式」は、具体的な労働状況を越えた当該社会一般がわけもっている文化的特性によって大筋のところが規定されていると考えることは妥当であろう。しかしまた、この「労働の理解様式」が日々の具体的な労働状況のなかで行なわれる労働経験によって、たとえ微々たるものであってもたえず修正されていることも事実である。その意味で、ゴールドソープ、あるいはターナー等当該社会の一般的文化特性を重視する見解も(25b)、ブラウナー、ケルン等労働状況を重視する見解もそれなりの説得力を持ちながら、一方の過大な重視により事態の本質にいま一歩近づいていないように思える。つまり、一般的文化特性と労働経験がモメントになって労働の理解の様式が形成され修正されていくという、よりダイナミックな視点が欠如されているように思えるのである。したがって、オートメーションの問題を考える場合も、単にそれに伴う再技能化や満足度の上昇といった観点からだけではなく、オートメーションによって生じた労働の構成原理における変化と労働者が従来いだいてきた労働の理解の仕方がどのように交差していったかという点から考えられねばならないだろう。

それならば、われわれはまず、用具的労働志向を根底から支えている労働の理解の様式と、表出的労働志向を支えている労働の理解様式との関係を明らかにする必要があり、その「差異」の構造を明らかにする必要がある。

われわれはまず、用具的労働志向を根底から支えているような労働の理解の仕方とはどのようなものなのか、を探らなければならない。

前述したように、用具的労働志向とは、労働を生活の再生産手段としてのみ考え、その評価を反対報酬の点から考量していく性向であった。それは生産者としての喜びを感じ、労働そのもののなかに自己実現の契機を見い出していく性向とは反対のものとされた。しかし、だからと言って、用具的労働志向が支配的な生産労働者において、生産労働そのものに喜びを感じ、自己実現の契機を見い出していくことが不可能なわけではない。

宮大工、かざり職などの伝統的職人仕事についての種々のルポルタージュ、あるいは、一般に経営ー労務管理的方策として推進されるQCサークル、ZD運動の報告書でさえ、労働の遂行それ自体のなかから生じてくる喜びの感情を具体的で、しかも生々とした情報の形でわれわれにつたえてくれている。これらの記述のなかに登場してくる労働は、それぞれ自己の能力の探索であり、その限界への挑戦であった。それは同時に、通常われわれが忘れている、労働が本来的に創造的行為であるということを思い出させてくれる。そこには、労働対象や労働方法に関して何らかの工夫をこらし、よりよい品質や方法を生み出していこうとする人間の「知的営為」が見られるのである。

ところで、こうした過程が別の面からみれば熟練形成の過程とほぼ同質のものであることはあまり意識されていないように思われる。確かに、名人と言われるような職人のする仕事と見習工の業務とを見るなら両者のしていることは根本的に異なるものに見えるが、彼らがそれぞれの仕方で仕事のなかに工夫をこらし、より適切な方法を探していくかぎり、両者とも熟練形成の各プロセスを歩んでいることに相違ない。しかも、この熟練形成＝創造性の発現という一連の過程は、科学者、あるいは技術者といわれる人々の行為にも生産労働者の労働にも共通して存在している過程である。したがって、用具的労働志向対表出的労働志向という対比は、労働に対する評価基準の点でこれら二つの層が相異っていることは教えても、労働の世界の理解の仕方それ自体の相違についてはほとんど何も言っていないのである。われわれはまずこれを知る必要がある。

「習らうより慣れろ」これが職人の熟練形成における基本的原則であったことは洋の東西を問わない。子守り、まま炊き、走り使いという戦前までの職人養成＝丁稚奉公の不可欠な要素が戦後に入って姿を消していってもこの「習らうより慣れろ」の原則はほとんどの職人社会で今も生きつづけている原理である。例えば次のような事例は業種を越えて職人社会の養成方法一般に通じる話であろう。話はちょうちん屋の例である。子守り、掃除、走使いといった丁稚奉公を二、三年勤め上げたあと、「やっと少したってやらしてもらえるのが細工場のかたづけだ。細工場のかたづけなんて、なんだばかくしェと思うかも知れねえが、実はこの時に言わず語らずに仕事の段取りを覚えるんだ。台はここに置いてホネはここへ置くんだな、紙はこう置いて糊なべはこっちだな、刷毛の大小はこの順席で座ぶ

とんの右側へ――　かたづけながらこういういう段取りが覚えられるんだ[26a]」

この後、話し手は、ナベで糊を煮る工程、骨削しの工程と養成の各過程について話しを進めていくのであるが、いづれにせよ、そこでは「言わず語らず」の原則が通っていることにかわりない。

いま一つ、職人労働の世界を具体的に理解するために理容師のかみそり磨ぎ作業を考えてみよう。

水とある種の潤滑剤を含ませた磨ぎ石の上をほぼ8の字形に刀先をすべらせながら磨いでいく。ある程度磨き込んできたら、刀先を自分の指先や手の甲に当てて磨き具合を見る。さらに特製の角度定規に当てて刀先の角度を見る。これらの作業をなん回か繰り返しながらかみそりを磨ぎ上げていく。――これがかみそり磨ぎ作業の外見的過程である。近年、磨ぎ作業を外注してしまう理容師がほとんどになったが、職人の磨ぎ作業はおおむねこうした工程をとるのが普通である[26b]。

さて、こうした作業を行なう人々にとって労働の世界はどのような形で存在し、どのような構成原理をもったものとして現われてくるであろうか。

労働というものはそれがどんなものであっても、一つの仕事の達成に向って、仕事のなかに含まれる各単位操作の内的関連をつかみ、その必然性を会得してゆくことにかわりない。ただその内的関連の把握の仕方、必然性の会得のあり方にその労働の基本的特徴があるといえよう。

それでは、ちょうちんはりや磨ぎ作業に従事する職人の労働の基本的特徴はどこにあるのだろうか。それは、操作の具体性、直接性である。彼らは操作の内的関連を自分の指先の感覚や、毎日の仕事場での手伝いの経験からつかむのであり、自分の感覚によって保証される道具の使いごこち、製品の出来ぐあいによって「必然」とかかわりあう。この自分の感覚という操作の具体性、直接性の点で、職人の労働は、理論的、原理的知識ないしは探究態度によって内的関連を確定し、必然性を内化していく科学者、技術者の労働とは一線を画しているのである。それ故に言わず語らずの原則が重視され、経験への絶対的傾斜が現われてくるのである。

しかもこの点で注目しておかなければならないのは、内的関連や必然性の確定に関する明証性の度合であり、必然性の性質に関する理解の深さである。たしかに、彼らは技術者や科学者とちがい内的関連や必然性の性質を理解するために、科学的、理論的探究態度をとらない。「言葉じゃうまく言えないけど」という職人に関するレポートにはかならずといってよいほど現われてくるこのせりふがこのことを最も端的に示している。しかし、これは、理解が浅薄だとか、客観性をもたないものだということを意味しない。彼らなりの仕方、つまり、具体的、経験的ではあるが、必然性や内的関連への深い理解に彼らの作業は裏打ちされているのである。さらに、客観性についても同職人の人々の間には、技能の程度、製品の良し悪しについて一定の客観的規準がどのような職種にも存在する。ただそれが、例えば大工の場合には、「観音びらきが正確に作れる」といっ

た、非常に具体的な形で定式化されているのである。

こうした、職人労働における「労働の具体性、直接性」、それに対応した「労働の具体的、直接的な理解の様式」は、単に伝統的な職人労働の範囲に留らず、生産労働者一般に多かれ少なかれ共通するものであった[27]。ところが、オートメーション、特にその中心をなす装置系工業の連続処理工程型生産の労働はこうした「労働の具体性、直接性」に大きな構造変動をもたらしたのである。この工程の中心的な労働である中央制禦労働の具体的な姿は次のようになる。

作業員の前面には大きなパネルが据付けられており、そのパネルの所々には、間欠的に点滅する光源が埋め入まれ、それら光源の間は多数の線によって結ばれている。そこでの作業はこうしたパネルを監視することである。その時一体、パネルに向っている作業員は何をしているのであろうか。彼らは具体的な、実際の生産工程の中で起っていることの反映としてインデックスシステムを操作しているのである。より数学的に表現すれば、実際の生産工程Xでおこっていることが、ある転換原理fの下で転換されたYの集合を操作しているのである。

こうした労働においては、前述した職人労働や従来の生産労働に特徴的な「労働世界の具体性、直接性」が著しく後退する。そして、労働は、いわば「抽象的な労働」になる。

このような労働については次の点が注目されなくてはならない。すなわち、転換原理fそのものがすでに確定されているなら、fの下で転換されたインデックスのシステムYの操作だけで通常は生産の目的が達せられる点である。そこでは労働の具体性、直接性が後退しているにもかかわらず、作業員自身は直接的な作業環境に埋没して作業を遂行するという問題を孕んだ状況が出現しやすくなる。のみならず、作業員が、そもそも科学的、技術的原理に裏打ちされた転換原理の存在自体を認知していないという状況さえ発生してくる可能性がある。こうして、労働が具体性、直接性を失い、抽象性を大幅に増しているにもかかわらず、多くの労働者は、技術者がするようには、理論的、科学的態度をもってそれに接近せず、いまだ、直接的、具体的な労働の理解様式に留まっているといっても必ずしもいい過ぎではなかろう。

ケルンの調査結果における、中央制禦労働に携わる労働者達が、労働状況の大幅な変質にもかかわらず、いまだ用具的労働志向をもって労働につき、一方、近年エキスパート的性質を減じつつある保守・保全労働者の多くがいまだ表出的労働志向を保持している現象。こうした現象の背後には、前者においては、直接的、具体的な労働の理解様式が現在も優勢であり、しかもそれが資本の要請とうまくマッチしている現象が存在し、後者においては、理論的、原理的な理解様式の伝統があるといえよう。そしてそれらがオートメーションを中心とする工程編成原理の変質と交差する点にオートメーション論議の成立する基盤があったのである。

むすび

もし、以上のような仮説が成立するとすれば、次のことが言える

のであろう。すなわち、一般的に言って、オートメーションを中心とする近年の情報処理に重点をおいた工程は、労働者全体にとって一義的に労働状況の変化になるとは位置づけられない。それが労働状況の変化になるかどうかは、「労働の理解様式」を中心として主体の側の契機になる。それ故、一つの状況に対して種々に反応する「労働者の分化、層化」が出現してくると思われる。そこに、これからの労働運動の困難さを見るのは我々だけであろうか。

しかし、労働の構成原理の変化に労働への理解様式がどう対応していくかを明らかにすることは単に労働の問題を越えてもう少し大きな意味をもつように思う。それは、人類の新しく生み出した電気的情報処理文明の人類集団の上におよぼした影響について考える際に大きな一歩になるという思いである。電子情報処理システムの急速な利用拡大はこの世紀の大きな特徴の一つである。しかし、このことの影響について我々の「情報」はあまりにも小さすぎるのではないだろうか。

註

(1) cf. R Blauner, *Alienation and Freedom* 1964 Chicago *P167* 邦訳『労働における疎外と自由』 佐藤慶幸監訳 新泉社一九七一年

(2) S Mallet, *La Nouvelle Classe Ouvriere* 1963 Seuil, 邦訳『新しい労働者階級』合同出報 海原他訳 一九七〇

(3) J. R. Bright, *Automation and Management*, 1959, Boston P176

(4) J. Woodward, *Industrial Organization*, 1965 Oxford, 邦訳『新しい企業組織』 矢島他訳 ダイヤモンド社 一九七〇 特に第一部

(5) 中岡哲郎 『工場の哲学』 平凡社 一九七一 特にⅥ章

(6) R. Blauner,op cit, P2

(7) ibid, P2

(8) ibid, P182

(9) ibie, P29

(10) A. N. Turner, & P. R. Lawrence, *Industrial Jobs and the Worker*, Boston 1965, P2

(11) ibid, P49, ff

(12) J. H. Goldthorpe, etal, *The Affluent Worker : Industrial Attitudes and Behaviour*, Cambridge, 1968

(13) ibid, P36, 労働者の判断に対する労働志向、及び一般的な生活視点の重要性についてはすでにバルダマスによって指摘されていた。cf. *W. Baldamas "Type of Work and Motivation"*, in : The British Journal of Sociology 1951. (Vol.2) P44. ff

(14) ibid, P36. ff.

(15) ibid, P38

(16) cf. H. Kern, M. Schumann, *Industriearbeit und Arbeiterbewusstsein*, Frankfurt／M 1970 P33.

(17) ibid

(18) ibid, P185.

(19) ibid, P195.

(20) ibid, P195

(21) ibid, P196

(22) ibid, P196

(23) ibid, P196.

(24) 中岡　一九七一　一二二頁

(25a) E. Fricke, u. a. *"Qualifikation und betriebliche Organisation"*, in : Soziale Welt 1973 ff. Göttingen.

(25b) ゴールドソープとターナーの見解が相違した原因は、前者がイギリス社会を対象とし、後者がアメリカ社会を対象にしたという対象のちがいにあると思われる。つまり、イギリスでは文化に関する対抗軸が、労働者対資本家＝経営者という階級的対抗性にほぼ一元化されているにもかかわらず、あるいは階級的対抗性が人々の行為基準の上で非常に大きな比重を持っているにもかかわらず、他方アメリカでは、少なくとも階級的対抗性と同程度に人種や地域といった対抗性が存在していると考えられる。こうした対抗軸の多元性がターナーの結論をゴールドソープの結論とは異なったものにさせたといえるだろう。しかし、両者とも、当該社会の一般的、基本的文化特性を重視した点では同一の視点に立つと思われる。

(26a) 斎藤隆介　『ちょうちん屋のままっ子』　角川文庫　一九七六　二五頁
また同氏の『職人衆昔ばなし』　文春文庫　一九七九も参照のこと。

(26b) 理容師からの聞き取りによる。

(27) cf. 中岡　一九七一　Ⅲ章の古典的工場における労働